

目的 色彩に対する好き,きらいの感情は,日常生活において快,不快の感情と結びつき,さらに環境色との複雑な色彩構成へと発展していく。

その基礎的な研究として,色彩の好き,きらいの感情が成長に伴って,どのように変化していくかを,青年前期から中期を経過した女子について解析した。

方法 被験者は東京家政学院中学生が同高校を卒業するまで('65~'71年1グループ80名,'66~'72年2グループ80名,'67~'73年3グループ70名)のものである。

試料は標準色票150色を用い,好きな感じの色,きらいな感じの色を,それぞれ3色ずつ質問紙法で選ばせた。色彩の観察はJIS Z 8723に従った。

色彩の分類はJIS Z 8721と8102に準じた。

結果 3グループで共通して,好きな色N9.5,きらいな色7.5Y5/6に対する頻度率は大である。その他の色は3グループ間に,ばらつきはあるが,青年前期では10B3/6,前期の終わり頃から中期に至ると3Y9/7とN1.3が好まれてくる。

きらわれる色は,10R P2/3と5GY4/4などである。

色彩に対する好き,きらいの感情は成長するに従って,個人差が強くなる。これは明度と彩度の属性において,微妙な変化を感じてくるからである。